

【書評】

長尾伸一『複数世界の思想史』

名古屋大学出版会，2015年，iv + 315頁 + 46頁

われわれが住んでいる世界とは別の世界があるかもしれない、つまり、世界は単一なのではなく、複数あるのかもしれない。このような空想をしたことがある人は、少なくないであろう。本書で取り上げられる「複数世界の思想」とは、たんに別の世界を空想するのではなく、「複数の世界が存在する」と主張する思想のことである。本書では、世界に関する複数性論は、「人間の日常世界およびその延長の全体と並行し、これに対応した統一性と充実度を持つ、未知あるいは不可知の領域が存在する」としての世界リプレゼンテーション（universum）の表^{リプレゼンテーション}現の仕方」（29）と定義される。複数性論は、古今東西の文明の中に見られたものであり、さまざまな形態で主張されたものであるが、本書で主に取り上げられるのは、そのうちの「天文学的複数性論」である。天文学的複数性論とは、地球以外の天体にも、地球と同じような生命、とくに知的生命が存在するという思想のことである。著者は、とくにヨーロッパ近代の天文学的複数性論に焦点を絞って、その主張の根拠・広がり・影響を明らかにしようとする。

近代の天文学である地動説が克服しなければならなかったのは、アリストテレス、プトレマイオスの天動説であった。アリストテレスの自然学によれば、宇宙の中心に地球が位置し、宇宙の果てには恒星天球がある。そのような世界は、有限で、永遠で、単一だとされた。アリストテレス自然学は中世の支配的な世界像となったが、別の考えを持つ者がいなかったわけではない。スコラ哲学者の中でも、オレームなどは、万能の神は無数の世界

を創り出すことができるはずだから、少なくとも可能性としては、無数の世界が存在すると主張した。さらに、古代の複数性論が本格的に紹介されたルネサンス期には、神の無限の力は「無限宇宙」を創造し、その中には知的生命が居住する世界がある、と主張するクザーヌスが現れる。このような古代以来の複数性論が近代天文学の一つの源泉であるとともに、近代天文学がその後の複数性論の根拠の一つになった、というのが著者の主張である。だが、その論証は容易ではない。

コペルニクス、ケプラー、ガリレイといった近代天文学の英雄たちに共有された形而上学的な動機があったとすれば、それは「世界の複数性論の思考枠組みであり、それが提供する関心と眼差しだっただろう」（57）。この関心と眼差しが、肉眼のかたにあるはずの他世界を実際に確認したいという強烈的な衝動となり、彼らを動かしたというのである。しかし、本書において重要な役割を果たしているこの議論が、「だろう」といった推測に頼る叙述になっていることは気にかかる。思想史研究において、誰が何の影響を受けたのかを証明することは、たしかに容易ではない。そのため、文献上の証拠や思想相互の関係の考察を積み上げて、説得力を高める必要があるわけであるが、この部分は物足りない印象が残ったと言わざるをえない。

地動説が登場すると、それが世界の複数性を主張する根拠の一つになった。地球が惑星であるなら、他の惑星にも地球と同じような世界があると推測できる。このようなアナロジーによる推測は、17世紀オランダの大科学

者ホイヘンスの議論に典型的に現れている。ホイヘンスはさらに、著者のいう「同等性原理」、すなわち、膨大に広がる宇宙空間が神の無限の力の創造物としての表出であるならば、そこには無数の世界が存在しなければならない、という思考方法も有していた。ホイヘンスの議論の仕方は、地球外知的生命存在論に基本的な枠組みを与え、18世紀のニュートン主義者にも継承されてゆく。

このように本書は、科学と宗教・形而上学との間に境界を設定するのではなく、「宗教的観念から形而上学、さらには経験科学へと、これらの体系的知が厳密な区別なく移行し合う様相」(309)を叙述するものとなっている。本書の貢献は、17・18世紀の英語文献の全文検索が可能なデータベース EEBO (Early English Books Online) および ECCO (Eighteenth Century Collections Online) を使って、複数性論の広がりをはっきりと明らかにしたことにあるといえるであろう。著者によれば、複数性論の議論そのものは単純で、内容上の展開は少なかったけれども、その広がりには膨大なものであった。本書は、夥しい量の文献資料を取り上げて、複数性論に関わる議論を、線ではなく面として捉えるのである。

本誌の読者が知りたいのは、おそらく、複数性論は社会思想にどのような影響を与えたのか、ということであろう。この点については、必ずしも多くはないけれども、いくつかの指摘がある。例えば、トマス・ペインである。ペインは、ホイヘンスなどと同様に、近代天文学の知識と有神論的複数性論とを結びつけ、宇宙空間には造物主が創り上げた知的生命の世界が散在すると考えた。そして、地球とは異質の環境に適合した、姿かたちが全く異なる宇宙人と人類が同一の宗教を信じる

同等の存在であるなら、人類の間に生まれながらの差別などあるはずがない。神の被造物であるすべての精神的存在は、本来同等の価値をもち、同等の権利を持って生まれたことになるだろう。ペインにおいては、この宇宙論的イメージが、啓示よりも科学を信仰の基礎にする「理性の時代」の「人間の権利」の主張を支える基礎的観念となった。世界の複数性とペインの理神論が表裏一体の関係を持っていたという指摘は、複数性論と社会思想との関係を示すものとして興味深い。

もう一つ注目すべき例を選ぶとすれば、それはフォイエルバッハである。本書最終章では、19世紀に複数性論が衰退していったことが論じられる。その流れに掉さす一人となったのが、フォイエルバッハであった。フォイエルバッハによれば、天空に広がる空虚な物質的空間に「意味」を与え、目的があるようにすることが、天文学的複数性論の意図だったが、それは実際には人間の空想を物理的世界に押しつけたにすぎない。フォイエルバッハにとって、複数世界は宇宙の中にあるのではなく、人間の中にある。その場合の人間とは、個人としての人間ではなく、個人の存在を超える言語共同体、あるいは認知共同体のことであった。このようにして、複数世界という思想を理解するためには、人間社会を理解することが必要となり、マルクスなどの社会研究へとつながってゆくことになる。

本書では主として天文学的複数性論が取り上げられるのであるが、ところどころで、可能世界論にも言及がある。可能世界論と科学や思想との関係という方面の研究にも期待したいと思うのは、欲張りというものだろうか。

(佐々木憲介：北海道大学)